

鴨下賢一（編著）、立石加奈子、中島そのみ（著）

苦手が「できる」にかわる！ 発達が気になる子への生活動作の教え方

石附 智奈美

（広島大学大学院、作業療法士）



本書は発達が気になる子どもたちが抱えるさまざまな生活動作の困難について、OTの視点から原因別に支援方法を示したものである。表紙に「文字の書き方、着替え、走りなど1000人以上の子どもの実体験から学ぶ自信が湧く77のアプローチ」とあるように、まさにOTの経験が豊富に詰まった1冊である。専門用語を最小限にとどめていることから、保護者や学校教員等、専門職以外の人が容易に理解でき、その場ですぐに活用できる内容である。

本書の内容は次の通りである。1章では「発達過程と不器用さを生む要因を知ろう」と題し、就学前の発達過程を教示したのちに、不器用さや運動面の遅れを生む要因を説明している。そして2章では、「日常でできる生活動作サポート法」として基本動作、学習、動き・遊びを網羅した77種類の具体的生活動作を挙げ、それぞれの支援方法を示している。単にうまくできない動作を教えるためのハウツー本ではもちろんない。さまざまな動作ができない原因を「両手がうまく使えない」、「感覚の未発達」、「力のコントロールが苦手」、「ものをみる力が弱い」、「身体イメージがとらえにくい」という5つの視点で説明し、さらに発達の段階を示すことで、支援の見

通しがもてるように配慮しながら原因に即したアプローチを具体的に示してくれている。

77種の生活動作の中から興味深い一例を挙げる。「No.48 ランドセルを背負う」である。この動作が難しい理由を「みえない背中であ腕を動かさなくてはならないから」と述べ、さらにこの動作は「羽織り服を着る動きにも通じる部分があります。（中略）就学前から羽織り服を片手ずつ着脱する方法を学んでおくとういでしょう」と概説している。原因別サポートとしては、たとえば「原因①両手がうまく使えない：背負うのにちょうどよい高さの机において状態で腕をとおしてみるところからはじめましょう」とし、「原因②感覚の未発達：腕・肩周囲や背中中の皮膚の感覚が鈍い場合には（中略）お風呂で体を洗う際に、肩ベルトがあたる場所では“ここにランドセルのベルトがくるね”と意識させる声かけをして、こすってあげるとよいでしょう」と教示している。

それぞれの動作には「ワンポイントアドバイス」も記されており、これは日々の臨床の中でわれわれOTが直感的に感じているであろう視点を見事に文章化している。たとえば「No.33 鉛筆」に関しては「持ち方にこだわるばかりに、書くこと自体が嫌いになってしま

う子どもがいます。（中略）子どもの手の発達段階にあった持ち方で、たくさん書かせてあげることが重要です」等、支援者側に必要な心構えを示してくれている。

さらに「誤解！」という欄も興味をそそる。これまで通例の支援方法にも誤った部分があることを指摘している。たとえば「手づかみ食べ」は多くの保護者や支援者が回避しようとする動作であるが、「No.1 スプーン・フォーク」では『手づかみ食べ』は、スプーンなどの操作が確立するまでは一般的にみられる行為です。（中略）食べたいという気持ちを大切に、はじめはこぼしてもよい環境を用意して、好きな持ち方で食べさせましょう」と記している。

最後に、本書はイラストが多く使われており、文章のみではイメージが湧きにくい経験の浅いOTの想像力を助けることもできるであろう。また学校教員とのコミュニケーションにおいてもイメージの共有に役立つはずだ。学校現場にぜひ持参したいと思える長年の臨床の中から生まれた知と技が詰まった1冊である。

〔B5変型 180頁 1,800円＋税〕
 中央法規出版 刊
 ☎ 03-3379-3862